

同志社よ、その名は一つの目的を意味する

2022 Spring | Vol.206

One Purpose

【同志社人訪問】

東京オリンピック金メダリスト
宇山 賢さんに聞く

Special Feature
Sustainable
Development
Goals

特集

を
考
え
る。
SDGS

Think about SDGs



DEAR
母校—
ALMA
人生の原器として
MATER

Vol.1

同志社
礼拝堂
「チャペル」
(重要文化財)

そこはいつも、穏やかな空気で満たされ、優しい時間が流れている。思索を深めるひとときは同時に、神との出会い、そして自分自身との出会いの時でもあった。プロテスタントのレンガ造りのチャペルとしては、日本に現存する最古の建物。

Check 

右記QRにて特別ムービーをご覧いただけます。



INDEX

- 02 DEAR ALMA MATER 同志社礼拝堂 [チャペル]
- 04 特集 SDGsを考える。
- 05 長瀬産業株式会社
代表取締役 兼 常務執行役員
池本 眞也さん
- 08 政策学部 服部 篤子教授
- 10 ASUVID京田辺
代表 正木 研史郎さん (理工学部3年次生)
- 12 ソーシャルマッチ株式会社
取締役副社長 樋口 麻美さん / 金 愛月さん
- 14 2022年度 予算編成方針について
- 15 新島塾 第4期開塾 / ALL DOSHISHA 募金
- 16 新任教員紹介・退職教員
- 18 ゼミで学ぶ 魅力を語る
- 20 本学教員の執筆図書紹介
- 21 同志社人訪問 東京オリンピック 金メダリスト 宇山 賢さん
- 24 My Purpose 挑戦する人 池邊 亮輔さん (神学部3年次生)

お知らせ

「One Purpose」は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションを図ることを目的として発行しています。より分かりやすく情報をお伝えするため、本号からデザインやページの構成を刷新いたしました。同志社大学の最新情報は随時ホームページでお知らせしております。ぜひご覧ください。

▶ <https://www.doshisha.ac.jp/>

卒業生の住所変更、発送停止を希望される場合の連絡先は以下にお願いします。
校友課 TEL: 075-251-3009 MAIL: ji-koyu@mail.doshisha.ac.jp

SDGs

Think about SDGs

を 考 え る。

一人ひとりの行動が

「誰一人取り残さない」

未来をつくる



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals) は、2015年にニューヨークの国連本部で採択された。将来にわたって持続可能で、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指す世界共通の目標。貧困や飢餓に終止符を打つことや、健康的な生活の確保、質の高い教育の提供など、実現すべき17の目標などが盛り込まれている。

将来にわたって持続可能で、よりよい世界を目指す17の国際目標「持続可能な開発目標」SDGsは、達成目標年である2030年まで残り8年となりました。当初、手探りだった企業やNGOなどの活動も徐々に進み、SDGsの理念も世間一般に認知されつつあります。今号では、SDGsをテーマに、企業の最前線での理念を実践しているOBやユニークな手法で研究をする本学教授、学生ボランティアサークルの代表やベンチャー企業を立ち上げたOGたちをご紹介します。



「誠実に正道を歩む」ことで サステナブルな社会の実現へ

長瀬産業株式会社
代表取締役 兼 常務執行役員

池本 真也さん

1984年同志社大学商学部を卒業後、長瀬産業に入社。2021年6月から代表取締役兼常務執行役員を務める。学生時代はヨット部に所属し、音楽イベントにも携わる。ヨットによる日焼けと髭がトレードマークだった。

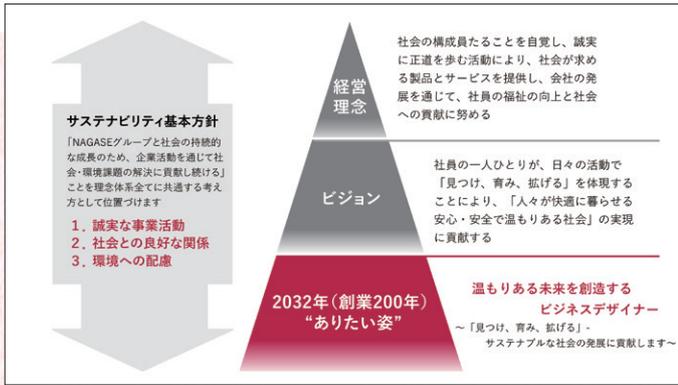
老舗企業の経営の かじ取りを担う

「長瀬産業は商社に分類されていますが、私たちは今、自分たちのことをビジネスデザイナーと表現しています。単に物を売ったり買ったりするだけではなく、お客様やお取引先様のニーズに応じて、必要な物を必要な場所に届けることと、さらにはそのための技術の研究・開発を行い、新たな付加価値を生み出すことを生業としています」。こう話す池本真也さんは、1984年の商学部卒。2032年に創業200周年を迎える老舗・長瀬産業の代表取締役兼常務執行役員として、経営のかじ取りの重要な一端を担っている。

長瀬産業の創業は1832（天保3）年。一般の人が製品を目にすることはないが、実はスマートフォンなど多くに、取り扱い商品や自社製品が使われている。長きにわたって、企業としてサステナブルな持続可能性を実現できた背景には、SDGsと親和性が高い同社の経営理念があった。

「創業以来、『誠実に正道を歩む』を経営理念として掲げ、実践してきました。いま思うと、弊社の先人たちは、SDGsの精神を誰に言われるまでもなく、理解していたのだと思います。手前勝手に、自分たちだけの利益を追求してきたのでは、ここまで

2032年の「ありたい姿」を位置づけ、理念体系すべてに共通する考え方として「サステナビリティ基本方針」を策定した。



長く企業として存続することはできなかったでしょう。誠実に正道を歩み、常に社会への貢献を念頭に企業活動を続けてきました。2015年に国連でSDGsが採択された時は、最初はびんとこなかったものの、そこに掲げられた17の項目を見て、多くの社員が、『これは今の自分の仕事とマッチする』と思ったはず」

海外のお取引先様、投資家と接する中で、当初それほど感じられなかったSDGsに対する関心が、年を経ることに加速度的に高まり、いまでは、「積極的に取り組まない企業は、世界市場から排除されてしまう」

状況になっている。NAGASEグループでも、その流れに沿い、2050年までのGHG(温室効果ガス)排出量実質ゼロを掲げた「カーボンニュートラル宣言」と、排出量算定と可視化を可能にするクラウドサービス「zeroboard」の導入を今年1月に相次いで発表した。

一方で、2021年度からスタートさせた中期経営計画「ACE20」では、2025年度までに「持続可能な事業」を営業利益の15%までに高めることを目標にするなど、

グローバル企業に不可欠なSDGs “持続可能な事業”の創出を目指す

SDGsに対する積極的な姿勢を示している。「ACE2.0」を策定するにあたり、われにとつてのサステナブルとは何かを徹底的に討論しました。その結果、初心に帰り、これまで通り企業活動を通じて社会に貢献し、そこから得た利益を社会に還元することが、われわれにとつても、社会にとつてもサステナブルだという結論に達したのです。

子会社である林原の独自技術で生産しているトレハは、食品の鮮度を長持ちさせる機能があり、フードロスの削減に大きく貢

献することができます。また、ヘルスケア分野のカプセル素材には、従来、動物由来のゼラチンが主に使われていますが、植物由来の素材「プルラン」を用いることで、消費者のオーガニック志向に応えることができます。これらの既にある製品に加え、新たな技術を開発することで、グループ一丸となってサステナブルな社会の実現に貢献していきます。われわれが携わるすべての分野で貢献するのが理想ですが、まずは実現できる分野から、社会に向けた技術提供や、課

フル回転の4年間

京都生まれの京都育ち。同志社大学では商学部在籍し、ゼミでは国際貿易や商取引の仕組みなどを学んだ。ヨット部に所属するかわら、音楽関係のイベントにも携わり、全国ツアーコンサートの運営や外国人ミュージシャンの招聘などに夢中に取り組んだ。「よく学び、よく遊びました。フル回転の4年間でした」と大学時代を振り返る。

「入学式の日、正門のすぐそばにある良心碑の前に立ち、そこに書かれている『良心之全身ニ充滿シタル丈夫(ますらお)ノ起リ来ラン事ヲ』の文字を読んだ時の感動を今もはつきり思い出すことができます。新島襄が亡くなる2か月前に同志社の学生に送った手紙の一節だということを後で知りました。いわば新島の『辞世の句』ですね。

新島は当時の幕府の禁を破ってアメリカ



zeroboardの公式サイト

株式会社ゼロボードが開発を手掛けるGHG(温室効果ガス)排出量算定・可視化クラウドサービス「zeroboard(ゼロボード)」。長瀬産業はゼロボードと業務提携を結び、本サービスの販売などを行う。





良心碑の言葉が
 精神的な支えを
 与えてくれました



に渡り、その地で宣教師として確固たる地位を得たものの、日本に帰国することを決意します。その時、『なぜ帰国するのか』と聞かれ、新島は『日本には教育が必要だから』と答えています。そして、帰国して同志社大学を設立します。

良心碑には、全身に良心をみなぎらせ、世の中に貢献できる人材に育ってほしいという、新島からの後進へのメッセージが込められています。こうした言葉に学生時代に接することで、何か重要な判断をするときに、自分の行くべき道が自ずと開けてくると思いますし、自分も実際、そうでした。そのような精神的な支えを与えてくれた同志社大学に感謝の念を抱くとともに、ここで学ぶことができて心底よかったですと思っています」

学生には「目立ってほしい」

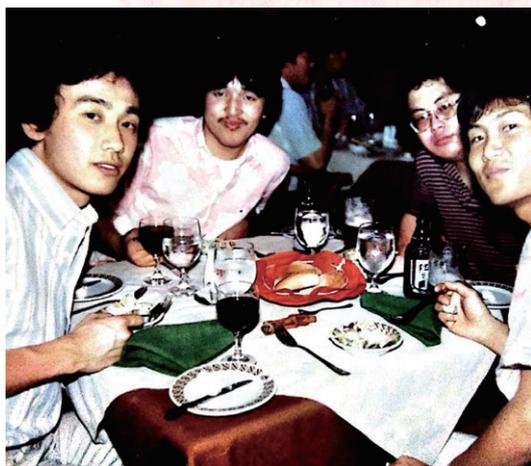
人生の指針を授けてくれた母校は、2025年に創立150周年を迎える。後輩となるOB・OG、そして母校に向けて、こうエールを送ってくれた。

「後輩の皆さんには、ぜひ世間で目立ってほしいですね。目立ち方は、人それぞれだと思います。首都圏の学生と比べて、どうも目立っていないように感じるので。ぜひ、同志社大学の学生として目立ってほしいと思っています。私たちが学生の頃は、ラグビーとか野球が強かったのですが、では、いま何が同志社大学の強みかと考えた時に、強

いスポーツもあり、優れた研究もあり、またOB・OGの活躍もあります。皆さんがこれからの世界を舞台にアピールし目立てると思っています。仕事柄、産官学の連携の場に立ち会うことが多いのですが、産業界へのアピール度もまだまだのように感じます。そうした技術系に限らず、様々な学部でこれまでの以上の結果が残せるよう頑張ってほしいと願っています」

在学中、フィリピンに貿易実務論ゼミの研修で渡航。写真はその時の食事風景（池本さんは左から2番目）。

当時、まだゼミで海外研修というのは珍しく、商社から転身した担当教授の考えで早うちに国際感覚に触れるようにという計らいだった。



養蜂から 見る都市デザイン



服部 篤子
政策学部 教授

専門は公共政策、社会起業論。大阪大学大学院国際公共政策研究科の院生当時、実家のある奈良市で阪神・淡路大震災を体験。直後からの市民による復旧復興活動に感銘を受け、市民のリーダーシップに着目してきた。現在、ソーシャル・イノベーションの理論と実践を研究テーマとする。

烏丸キャンパスの屋上で、防護服に身を包んだ数人がミツバチの巣箱に手をかける。飛び出してきたハチたちを手にした燻煙器で大人しくさせ、巣箱内を確認する姿は手慣れたものだ。この「養蜂作業」、実はれつきとした大学の授業。ソーシャル・イノベーション（社会変革）を研究する服部篤子教授による、フィールドワークの「コマ」だ。

「社会をより良い方向へと変革するには、人々の意識変容と行動変容が必要です。様々な社会問題が顕在化し、国連がSDGsを採択したことで社会の意識は大きく変わってきましたが、行動変容にまではなかなか至っていないのが現状ではないでしょうか。頭で理解したことをアクションにつなげるには、フィールドワークで主体的に学ぶ姿勢を身につけることが大切。その一つとして都市養蜂に取り組んで



います」と服部教授は説明する。

都市養蜂に関心を持ったのは15年前、銀座のビルの屋上で養蜂に取り組んでいる団体がいることを知ったのがきっかけだ。その団体、「銀座ミツバチプロジェクト」は、ハチミツ採取体験や出前授業を通じて子どもたちに食育や環境教育を行い、また採取したハチミツをブランド商品化して収益を上げていた。ミツバチは危険な虫ではなく、むしろ様々な恩恵や気付きを与えてくれる。そんな理解が進み、奇想天外な大都会での養蜂は、地域緑化推進へと、人々の行動変容も促していた。そして、他者や地域のことを考えるようになる、楽しみながら人々の意識と行動を変えていく、ソーシャル・イノベーションの理想型ではないか。活動を追い続け、満を持して2019年、院生の協力を得て「同志社ミツバチラボ」をスタートさせた。

ハチから「社会」を学ぶ

「定期的に巣箱の中を確認してハチの健康状態をチェックしてやること、巣箱を開ける際に刺されないよう注意すること。養蜂は楽しい活動ですが、冬の温度管理とダニ対策がアマチュアでは難しいところです」と服部教授。小さなミツバチにはブラントの花も十分な蜜源となり、むしろ街中の方が、農薬を使う農村地帯より生息しやすい面もあるという。「春は桜、秋はセイタカアワダチソウからも蜜を採取し、季節によってハチミツの色が変わるのも興味深い発見だった。量は少ないながら順調にハチミツを採取でき、コロナ禍前には、地域の親子向けにハチミツ採取体験を開くこともできた」と説明する。

また、「1匹のハチは弱い存在でも、その集団が作る巣の構造は高い強度を誇る六角形。弱いかからこそ強くして持続可能にしようということにハチたちは人間より早くしてきたわけです。そこからダイバーシティについて考えたり、働き蜂が全て雌であることからジェンダー論議になったり。養蜂



服部教授は、ポストコロナの新しい社会に向けて同志社大が始動させた研究プロジェクトに「社会・経済」の領域で参加。「持続可能な地域経済に向けた共創コミュニティの再考」というテーマで、都市養蜂を切り口に共生社会の形成を目指す。



一緒に考えよう
SDGsの
これからのカタチ

社会起業家という選択肢があることが世に広まり、若い人の関心がこの二十数年で高まっていることに希望を感じると語る服部教授。「若者は可能性があります。社会がもうちょっと受け止めなきゃいけない」



春から秋にかけて、街中を飛び回って蜜を集めるミツバチたち。働き蜂の寿命は3週間ほどながら、女王蜂は約2年生き、冬を越して命をつないでいく。

を通じて院生たちは様々な気づきを得ています」と手応えを口にする。具体的なアクションの一つとして、蜜蝋でロウソクを作り、ハチミツとセットにした防災グッズ制作も考えているという。

SDGsを好機にアウトプットを

ソーシャル・イノベーションもSDGsも、一人が声を上げるだけでは達成はおぼつかない。経済的にも持続可能なプランを示し、周囲の賛同・協力を得ることが不可欠だ。その点、研究を始めた20年前と比べ、「SDGs」という共通言語ができた現在には、好機なのではないかと服部教授は考えている。「2030年をどんな社会にしたいのか、ビジョンを描いて働きかければ、協力してくれる企業や自治体はあるはず。意欲のある学生を、大学も学部の垣根を越えて応援します。失敗を重ねながら、アウトプットの経験を積み上げてほしい。」

ソーシャル・イノベーションの本質は、様々な組み合わせや連携によって新しい価値を創造していくこと。フィールドワークでの学びを他者との連携に生かし、地域を動かしていく社会起業家が、同志社ミツバチラボから生まれてくることに期待している。